

芥川竜之介における宗教(下)

渡 辺 貞 磨

五

だが、勿論、信仰は理性を否定するものではない。理性をうしなつた信仰は狂信と呼ぶべきであろう。しかし信仰を欠いた理性も亦、やがては自らを焼く炎となりかねない。芥川はこのことを知悉していた。

「神と悪魔、美と醜、勇敢と怯懦、理性と信仰、——その他あらゆる天秤の両端にはかう云ふ態度をとるべきである。古人はこの態度を中庸と呼んだ。中庸とは英吉利語の good sense である。わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを待たない限り、如何なる幸福も得ることは出来ない。」(侏儒の言葉、自由意志と宿命と)。

このことばの書かれたのは、大正十二年、彼が三十二歳の時である。この頃、彼の心の傷は、まさほど深いものではなかったであろう。ここに見られるものは、むしろきわめて健全な思想である。だが、結果的に云えば、彼はこのことばを、実生活の上で押し進めることはできなかった。

ここで、彼と、彼自身のうちなる理性との戦いについて考えてみなければならぬ。「或阿呆の一生」の中に次のような一節がある。

「人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテールはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ易々と空へ舞ひ上つた。

同時に又理智の光を浴びた人生の欲びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまっ直に太陽へ登って行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光に焼かれた為にととうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……」(十九・人工の翼。

ヴォルテールが彼に与えたのは理智の翼であつた。理性は、対象の本質に迫り、それを剔抉する。その時、彼の理性は強者のゆとりをもつて、おのれの足下にあるものに反語や微笑を送るであろう。まさしく、理性は、現実と戦い、現実を把握することにこよなき武器であると云つてよい。二十代の彼の作品、ことに「芋粥」や「地獄変」等は、そうした彼の理性の勝利の記念碑である。

だが、理性の剣は、他を抉ると同時に、おのれ自身にもさしむけられている。他の悪を見ぬく理性は、おのれの醜さをも見のがすことはない。

「一かどの英霊を持った人々の中には、二つの自己が住む事がある。一つは常に活動的な情熱のある自己である。他の一つは冷酷な、観察的な自己である。この二つの自己を有する人々は、ややもすると創作力の代りに、唯賢明な批評力を獲得するだけに止まり易い。

「略——私も私自身の中に、冷酷な自己の住む事を感じる。この嘲魔を却ける事は、私の顔が変へられないやうに、私自身には如何とも出来ぬ。」(点心・嘲魔)

三十歳になつた彼は、その随筆「点心」の一節にこう記している。理性というこの両刃の剣は徐々に彼自身に反逆しはじめていたのである。そして、死の前年頃には、このおのれのうちの対立は、もっと深刻なものとなる。

「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生観上の現実主義者、氣質上のロマン主義者、哲学上の懷疑主義者等、等、等——それは格別差支へない。しかしその何人かの僕自身がいつも喧嘩するのに苦しんでゐる。」(僕は)。

では、どのように喧嘩するのか。彼は遺稿の一つ「闇中間答」の中で、今一人の彼自身「或声」と問答している。

「僕 ……僕は死よりも不快なことに会へば、いつでも死ぬのにためらはないつもりだ。

或声 ではなぜお前は死なないのだ？ お前は誰の目から見ても、法律上の罪人ではないか？

僕 僕はそれも承知してゐる。——略——

或声 しかしお前は贖はない。

僕 いや、僕は贖つてゐる。苦しみにまざる贖ひはない。

或声 お前は仕かたのない悪人だ。

僕 僕は寧ろ善男子だ。若し悪人だったとすれば、僕のやうに苦しみはしない。のみならず必ず恋愛を利用し、女から金を絞るだらう。

—略—

或声 兎に角お前は苦しんでゐる。それだけは認めてやっても善い。

僕 いや、うっかり買ひ冠るな。僕は或は苦しんでゐることに誇りを持ってゐるかも知れない。—略—

—略—

或声 お前の悲劇は他の人々よりも遅しい理智を持つてゐることだ。

僕 嘘をつけ。僕の喜劇は他の人々よりも乏しい世間智を持つてゐることだ。」

これはきりも際限もない自己分裂である。一方のおれが冷酷に自己の悪をあばき、他のおれが、そのあばかれた悪を必死に取繕おうとしている。そればかりではない。芥川が見ぬき、そして軽蔑していたはずのこの世の醜さが、おのれの悪とともに、彼自身を逆に責めさいな

むことになる。

「……何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。—略—

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだった。彼等を——彼の軽蔑してゐた社会を！」

(或阿呆の一生・四十一・病)

おのれの理性を人工の翼として天上を望む、それはとりもなおさず、「我」を信仰する、ということであろう。だが、皮肉にも、その理性が、「我」への信仰を根底からゆるがすのである。

かくして、ヴォルテールから出発したはずの彼は、その晩年に至ってヴォルテールを詛わずにはいられなかつた。

「わたしはヴォルテールを軽蔑してゐる。若し理性に終始するとすれば、我我は我我の存在に満腔の呪詛を加へなければならぬ。しかし世界の賞讃に酔つた Candide の作者(私註、ヴォルテール)の幸福さは！」

(侏儒の言葉・理性)

あるいは、云う。

「理性のわたしに教へたものは畢竟理性の無力だった」

(同上、理性)

おのれが理性的であるばかりに、おのれの醜悪さや娑婆苦を思い知らされねばならぬ。この危機を脱するために「我」への信仰の回復が必要である。だが、理性がそれを許さない。こうなれば、もはや堂々めぐりである。ほかにより高次な活路を見出さぬかぎり、あとは破滅の渦に引きよせられて行くばかりであろう。

こうした芥川にとって、善悪の彼岸に立つ「超人」の思想は、一つの憧憬めいたものとして感じられていたようである。例えば、日本の豪傑を論じて彼は云う。

「我々の真に愛するものは常にこの強勇の持ち主である。常にこの善悪の観念を脚下に蹂躪する豪傑である。我々の心は嘗て罪悪の意識を逃れたことはない。青丹よし奈良の都の市民は卵を食ふことを罪悪とした。と思へば現代の東京の市民は卵を食はないことを罪悪としてゐる。これは勿論卵ばかりではない。『我』に対する信仰の薄い、永久に臆病なる我々は我々の中にある自然にさへ罪悪の意識を抱いてゐる。が、豪傑は我々のやうに罪悪の意識に煩はされない。実践倫理の教科書はもとより、神明仏陀の照覧さへ平然と一笑に附してしまふ。一笑に附してしまふのは『我』に対す

る信仰のおのづから強い結果である。——略——我々はかう云ふ旺盛なる『我』に我々の心を暖める生命の炎を感ずるのである。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずるのである。」(辭見)。

だが、勿論、そのような超人は、古代の伝説やニイチエの中には生存し得ても、近代の実社会には求むべくもない。芥川自身「闇中間答」の中で、おのれに向つて「お前は超人だと確信しろ。」「お前は善悪を蹂躪してしまへ。」と呼びかけながら、やはり「僕は超人ではない。僕等は皆超人ではない。」と応えざるを得なかつた。では、近代社会において娑婆苦を超えて強者たり得るものは誰か。この解答は、次に掲げる「侏儒の言葉」の中から容易に見出すことができるであろう。

「古人は神の前に懺悔した。今人は社会の前に懺悔してゐる。すると阿呆や悪党を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆苦に堪へることは出来ないのかも知れない。」(懺悔)

「彼は誰よりも単純だった。」(或る仕合せ者)
即ち、自らの悪に苦しむことのない悪党、「彼以外の人人を悉く阿呆と考へてゐる」ような阿呆、あるいは単純に信じ単純に前進することのできる者、換言すれば理

性に欠けた人々にとつてのみ、この世はあかるく輝いているのである。なぜなら、これらの人々は、「我」を信じて疑わないであろうから。

ここで再び、五位の入道やれぶろぼすを思い返さねばならない。

五位殿は極悪人であった。れぶろぼすは悪魔の下部となった。しかし彼等はそのことでいささかも苦しんではいない。彼等自身は、苦の救済を仏・キリストに求めたのではないのである。五位の入道が、仏を見奉るまでは西へ参ろうと決意したのは、ただ仏が慕わしかったからであった。れぶろぼすがキリストに仕えようと思ひ定めたのは、キリストが悪魔よりも強者であったからであった。五位の入道は仏を呼びつつ西を目指し、れぶろぼすは流沙河のほとりに渡守となった。だが、彼等には、それを宗教的な善としておこなっている、という意識は全くなかった。彼等は、ただ、おのれの行為が、仏の、キリストの、心になかうであろうことを信じて、それをおこなったのである。その意味で、彼らは、まさしく善悪の彼岸に立っていると云つてよからう。彼等は、おのれの行為が、仏に、キリストに、つながる道であることを信じてうたがわなかった。これは「我」への信仰

の究極的な姿である。彼等は、一度は「我」をすてて、絶対のかなたを目指した、だが、その時、より高次な「我」への信仰が復活したのである。

無論、彼等の人生は、彼等が絶対を目指さなかったとしても、あかるかったであろう。単純な彼等は、おのれの力を信じていたはずであり、しかも、善悪の渦中に苦しむことがなかったはずであるから。

彼等は、いかなる時にも、おのれの生き方に疑惑を抱くことはなかった。おのれの求めるままに恬然として人を射殺し、あるいは悪魔に仕えた。そしてまた、それ故に、一切をかなぐりすてて、唯一最高のものを目指すこともできたのである。

「我」への信仰にあつい超人的な人間にとつては、この世のみならず、彼土への道も亦あかるい。実は、芥川は、宗教的救済というものを、かかる人間の上にか認めようとしなかったのであつて、諸の疑惑や煩惱にさいなまれながら、その苦闘の果に救われたというような物語は、つまり芥川のような人物が救われたというような物語は、その生涯に一つも書いてはいない。というより、もっと積極的に、そうした人々が救われたなど云っているのは嘘だ、とさえ考えていた。

芥川は「河童」の中で、河童国の宗教として、近代教——又の名を生活教——というものを創りあげている。この宗教において、聖徒として列せられているのは、実際に信じられそうにもない神や超人を、どうにかして信じようとした、あるいは信じているかの如く「悲壯な嘘」をついていた人々——例えばストリンドベリイ・ニイチエ・トルストイ・国木田独歩等——である。かかる人々が聖徒とせられているのは、彼等が、そのような精神的苦闘の中で、一生を自殺もせずに生きぬいた、という理由に基いている。こうした彼等の生活力は、彼等と同じ苦にあえぐ芥川の目には、まさしく聖徒と呼ぶにふさわしい荘嚴なものとして映ったことであろう。

理性は、「我」への信仰をうしなわせる。公式的に考えるならば、人が神を、仏陀を見出すのはこの時であろう。だが、芥川における近代人は、もっと複雑であった。彼は、それでもなお、その理性を信じようとしたのである。そしてその理性は、おのれがすがらねばならぬ絶対者をも解釈してしまった。人間によって解釈せられたい絶対者は、もはや絶対者としての絶対性をもつことはできない。芥川が、彼等の救済の中に嘘を見出したのも、このような理由に基いていると云つてよからう。

ところで、ストリンドベリイやトルストイ等の一生がそのような暗澹たるものであったとすれば、彼等の一生を支えたのは、その生得的な生活的エネルギーだったに違いない。だが、彼等と同じ暗闇を歩きながら、彼等のようなエネルギーを有ってはいなかった芥川がそれでもなお生きるためには、どうすればよかつたのか。その解答は、彼の死の直前になった「続芭蕉雜記」の中に見出すことができる。

芥川によれば、芭蕉は、西行のような肉体的エネルギーも神経的エネルギーももってはいなかった。にもかかわらず、芭蕉は、日本の生んだ「大山師」であり「したたか者」であつたという。それは何に由来するのか。

「彼(芭蕉)は実に『人』としても文芸的英雄の一人だつた。芭蕉の住した無常観は芭蕉崇拜者の信ずるやうに弱々しい感傷主義を含んだものではない。寧ろやぶれかぶれの勇に富んだ不具退転ていせんの一本道である。——略——兎に角彼は後代には勿論、当代にも滅多に理解されなかつた、——略——恐しい糞やけになつた詩人である。」芥川は、芭蕉の住した無常観を、やぶれかぶれの、糞やけの一筋道だと云う。そう云う表現はいささか奇矯である。だが、やぶれかぶれとはおのれの理性のはからいを

すてるということであろう。おのれが信じられない、だが、この現実にはかおのれを生かす道がないとしたならば、おのれをむなしうしてその現実の中におのれをゆだねる度胸が必要である。おのれが信じられない、そして神も仏陀も信じられない、しかし、おのれの救いは宗教にしかない、と思い定めたならば、おのれの一切のほかに力をすてて、神や仏陀の心になかなく生きて行く不退転の勇氣を持たねばならぬ。

芥川には、すべてが判っていた。だが、彼には、自らはからいをするにはできなかった。芥川の悲劇は、何よりも自らの力を恃もうとした者の悲劇であった、と云つてよいであろう。そして、自らの力を恃んだ彼は、自らの力をもって、絶対者に最後の反逆をした。彼は自らその命を断つたのである。彼が我子に与えた遺書の中には、次のように書かれていた。

- 一、人生は死に至る戦ひなることを忘るべからず。
- 一、従つて汝等の力を恃むことを忘るなかれ。
- 一、若しこの人生の戦ひに敗れし時には、汝等の父の如く自殺せよ。

六

芥川は、信仰に対して与えられる救済のあることだけは信じていた。だが、彼自身は、神を仏陀を信じることはできなかった。

それはなぜか。彼は、自らはからいを超えて信じなければならぬはずの神、そして神の子キリスト、あるいは仏陀を自らの理性で解釈してしまった。人間の理性の限界の中で解釈せられた絶対者、それはもはやおのれを救済するに足る能力を持ってはいない。

芥川は、自らの理性を武器とした。だが、やがてそれは芥川自身の存在そのものに疑惑の眼をむけ始める。神は、かかる時にこそ必要であった。勿論、芥川も亦、救いに手をさしのべた。だが、自分自身に疑惑の眼を向けた彼の理性は、神すらも、信じるより先に解釈してしまったのである。このような姿勢で神に対するかぎり、救いは決して生れては来ない。かかる姿勢は、近代人の悲しい習性とも云えるであろう。自らを信じられないものは神すらも信じられなくなってしまふのである。

この絶対絶命の窮地を脱するためには、おのれをむなしうした——芥川によればやぶれかぶれの——飛躍をなしとげる勇氣がなければならぬ。だが、芥川は遂にその勇氣を持ち得なかった。——自らの命を断つ勇氣は持ち

得たのに——。彼の死の床近くおかれていた聖書は、しかし、実は彼の魂からは無限に遠くはなれていたのである。

「或阿呆の一生」は、

「彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。

言はば刃のこぼれてしまった細い剣を杖にしながら。」
 ということばで終っている。そこには、おのれの理性を唯一の武器として一生を戦ひ続けた今世紀のドン・キホーテの悲しい姿を、まざまざと見ることができるのである。

さて、信仰に対して救済が与えられるということだけは信じてうたがわなかった近代の日本人の一人に「河童」における聖徒、国木田独歩がある。

独歩の生涯を見ると、それは決してあかるいものではないにせよ、常に生活的エネルギーにあふれている。政治家、教師、新聞記者、作家、事業家、これらは彼が夢想し、あるいは実際に体験した職業の数々である。だが、彼は、今、眼前にある現実そのものに対して情熱的だったのではない。「吾は宇宙的理想的に由て政界に立たんと欲す」(欺かざるの記、二十六・二・一九)というように、現実のかなたにある理想に対して情熱的だったのだ。

ある。この理想への情熱は、当然、青年独歩を神に接近させる。「欺かざるの記」には枚挙にいとまのないほど、神を信じる、ということが記されている。だが、これは結局、青年期の感情のたかぶりではなかった。

三十歳をすぎた彼は云う。

「無窮を統べ給ふ神よ、常に此生の泡沫の如きを感じて、容易く永久の生命を信ずる能はざる我をも憐み給へ。人類ありて以来、幾千幾幾万の我々が祖先今何処にありや、あゝ神よ。時の不思議なる謎を示し給へ。」
 (悪魔)。

永遠の生を信じられないおのれを神に哀訴する、ここにはまさしく神を信じようとして信じられない者の姿がある。そしてこれは、遂に生涯彼の超えられない壁となった。彼は死に間近い頃、彼の信仰の師であった植村正久に「貴方は私の信仰を開く合鍵を持って居るから、私を救ってくれ」と求めたが、植村は「合鍵をもっているのは神だから、神様に祈らなければならぬ」と答えた。しかし独歩は、どうしても祈ることができないと云って泣いた⁽⁷⁾という。

独歩も神の救いのあることを信じた。しかし、彼も亦、神の前に、おのれをむなしうして、ただ祈ることは

できなかつたのである。

芥川と云いこの独歩と云い、彼らの悲劇は、近代人にとって絶対者の前におのれをむなしうするということが、いかに超えがたいものであるかを我々に語りかけている。その芥川も独歩も今はすでない。だが、彼らの問題は決して対岸の火事ではないのである。その意味でも、独歩における宗教の問題は、さらに稿を改めて論じたいと思う。

(7) この部分は、吉田精一博士が「自然主義の研究」において指摘せられたところによった。